
太陽の花が咲くとき

彼方 ちさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の花が咲くとき

【Nコード】

N2466BA

【作者名】

彼方 ちさ

【あらすじ】

家の階段から落ちたら異世界にトリップしていました。

でも、一言言わせて欲しい。「なんで『また』田舎なの？」

田舎暮らしの女子高生、サナの異世界物語。コバルト短編小説15

5回もう一步の作品。

家の階段から落ちたら、異世界に辿り着いた。

嘘みたいだが本当の話だ。さつきまで家の中だったはずなのに、階段から落ちたと思った途端、田園の真ん中に放り出されていたのだ。いきなり知らない場所に放り出された少女。佐奈は目を丸くして辺りを見回した。打ったお尻がひたすら痛い。

ぺたんとしていたお尻には暖かい地面の感触。見渡す限りの畑に、奥には小さな教会が見える。数える程しかない民家は粗末なもので、そのすべてが赤い屋根だった。そして目の前には佐奈と同じくらい目をまん丸くしている同じ年頃の少年。健康そうに日に焼けている彼の服装は木綿で作られた上着で、首元を紐で縛って調整してある簡単な物だ。明らかに現代日本の服装ではない。

彼の大きな黒目がちの瞳には、佐奈が映っている。苦勞して毎朝巻いている長い髪に、髪色は流行中のオレンジブラウン。2重にしている付け睫毛とラメ入りのリップで飾った佐奈を見て、目の前の少年は小さく「派手な女の子……」と呟いた。

「何でっ……」

呆然として、佐奈は呟く。その言葉は此処は何処？ や私は誰？ などという単純な感情ではなかった。

「何でまた田舎なのよ……！」

三浦佐奈、17歳。現在の住まいは冬なお寒いとある地方。人口約1500人。両親の仕事、駆け出し農家。そう、彼女はこんな所に飛ばされなくても立派に『田舎』に住んでいたのだった。

佐奈は夢を見ていた。

夢だと分かるのは、それが繰り返している悪夢だったからだ。ぼんやり立ちすくむ佐奈の目の前に父親が現れる。農家の息子で、都会の野菜は不味い、が口癖の父親が何も考えていなさそうな笑顔を浮かべて言った。

『いやー、やっぱり都会の空気は父さんには合わないよ』

私には合うのよ、放っておいて。佐奈の言葉は声にならない。その横で、最近園芸に目覚めた母親がゆったりと微笑む。

『脱サラして農家に転身、なんて今時よねー、ほほほ』

何が今時だ。あんた達が今時に走った所為で、私は今時の女子高校生から遠く離れた所に住むことになったんだ。

次に目の前に現れたのは、同じクラスで委員長だった加藤君。背が高く、優しい笑顔が印象的な憧れの人。

『三浦……引越すんだってな。俺、実はお前の事好きだったんだ。残念だけど、元気でな』

ちよつと待て。なぜ過去形なんだ。本当に好きなら遠距離恋愛をする覚悟を見せてみる。それとも何、田舎の子は恋愛対象じゃないとでも言うのか？

まるで溶けるように消えた加藤君を求めて手を伸ばすと、いつの間にか可愛らしいピンクの便箋をその手に掴んでいた。懐かしい、友人達の丸文字。

『サナ、元気にしてる？ こっちはみんな元気にやってるよ。今日もカラオケ行っちゃったあ。ところでさあ、サナン家の住所、超長くない？』

「田舎で悪かったなあ！」

勢いよく起き上がった佐奈は自分がベッドに寝かされていたことに気付いた。横にはさつき見た少年が声も出せないほど驚いた様子で佐奈を見つめている。どうやら佐奈はこの世界についた途端、意

識を失つたらしい。

佐奈はおそろおそろ、手足を動かしてみた。大丈夫、どこも痛くない。

「食べる？」

もう佐奈が叫ばないようだと分かって安心したのか、少年がそつとお椀を差し出した。木をくりぬいて作ったお椀には暖かそうなスープが入っている。

「……食べる」

お腹はかなり減っていた。佐奈は有難く頂くことにする。ジャガイモや人参がたっぷり入った野菜のスープは、佐奈の父親が大絶賛するであろう美味しさだった。

「ありがとう」

全部平らげて、お椀を少年に返す。少年はにっこりと微笑んでお椀を受け取った。

加藤君に似ている、かもしれない。少しだけ佐奈は思った。この適当に長さを揃えただけの髪形と日に焼けた肌、そんなに高くない身長を除けば、の話だが。

「僕はホラン。君は？」

佐奈がじつと見つめている事に気付いたのだろう、ホランはまるでその顔しか出来ない、とでもいうような笑顔のまま親しげに話しかけた。

「……佐奈」

「サナ、か。ええと、ここはロゼスの村っていう所なんだ。多分……サナのいた国とは違うというか、全く違う世界に来ちゃったんだと思うんだけど……」

少年は佐奈を困惑させないようにだろう、言葉を選んで慎重に話す。その一方で佐奈は平然と頷いた。

「そのようね」

「えっ？」

全く驚きもしない佐奈をホランは意外そうに見つめる。佐奈はベ

ツドに上半身だけ起こしたまま窓の外を眺めた。外の眺めはまるで中世の絵画のようだ、と思う。しかし農村の絵だ。なぜ飛ばすなら景気良くどこぞの町の屋敷にでも飛ばされなかったのか。贅沢をいうなら城が良かった。中世の城。素敵じゃないか。

「これが前住んでいた町のタワーレコードで、CDでも物色している時に飛ばされたんなら驚くわよ。でもあんな田舎の築何十年だから分からない古臭い家が異次元の、これまた田舎に繋がるのが不思議は無いわ」

佐奈は大げさにため息をついてみせた。ホランは良く分からないという風に首を傾げたが、またすぐ笑顔に戻って佐奈を励ました。

「大丈夫だよ。しょっちゅうでは無いけれど、時々あるんだ、知らない世界からお客様が来るのがさ。家の母さんは何度か異世界のお客さんをもてなした事があるから安心だよ。それに普通はみんな、割とすぐ戻れているみたいだし」

話の途中で部屋の扉が開いた。と、ふっくらした体系の人の良さそうなおばさんが笑顔でいってくる。恐らくホアンが言っていた『母さん』だろう。

「ああ、起きたんだね。どう、ご飯はあれだけで足りたかい？」

おばさんは佐奈が寝るベッドに近づきながら、いつまで女の子の寝姿を見つめるつもりだい、と言ってホランを追い払った。

おばさんは近くで見るとなかなかの体格だった。エプロンで覆い隠されてはいたが、お腹はでっぷりとしており、にっこり笑うとえくぼの出来る顔もまん丸であった。学校の面談の時にウエストの締まったスーツとサングラスで来て注目を浴びた佐奈の母親とは大違いだ。まあ、そんな母親も今では大根の成長だけが楽しみ、常にゴムウエストのズボンを履いているおばさんになってしまったのだが。

「美味しかったです、ご馳走様でした」

とりあえず佐奈はおばさんに愛想よく挨拶した。異世界に放り出された以上、誰かの助けを借りなければ生きてはいけない。そうい

う意味で目の前のおばさんには好かれる必要があると判断したのだ。そういう計算高い所を指摘され、本当あんたは今時の女子高生ねえ、と母親にため息をつかれる事もよくあるのだが。

「そうかい？ 嬉しいよ」

佐奈の黒い考えなど疑いもせず、おばさんは嬉しくて仕方ないというようにその場で弾んでみせた。家がミシミシとなって、佐奈のベッドも微かに揺れた。

「何してるんだよ、母さん」

呆れたようなホアンの声が聞こえる。おばさんは、なんだよ五月蠅い子だね、といいながらも大人しくなった。

「ここはね、貴方みたいな可愛い女の子にはちよつと退屈な場所かもしれないけど。なーんも無くてさあ。でも元の世界に戻るまでの辛抱だからね」

「……無事戻つても、似たようなものですけどね」

苦々しく、佐奈は呟く。おばさんはそんな小さな声も聞き逃さず、あらそうなの、と頷いた。

「それはいい事ね。いや、前にね、ここに来た異世界の子がねえ、すっかりここが気に入っちゃまって元の世界には帰りたくないって言った事があるんだよ。やっぱり木がないと清しい呼吸が出来ないって言つてねえ。その点、あんたは元の世界でも沢山自然がある訳だ。いや、良かった良かった」

そう言うおばさんに向かって、佐奈は精一杯の作り笑いを返した。何が木だ。自然だ。私はビルが無いと呼吸できない。

「サナ、こつちだよ」

ホアンの呼びかけに、佐奈は眠い目を擦りながら外に出た。朝日が昇ったばかりの空。時計がないので詳しくは分からないが、恐らく朝の5時頃だろう。もちろん、普段ならベッドで熟睡している時

間だ。眠くて仕方が無い。

「何？」

それでも出来るだけ愛想よく返事をして、すでに川から水を運ぶという労働を終えたホアンの元へと向かう。彼は畑の一角でしゃがんでいた。

佐奈がこの家に来て、1週間が過ぎていた。テレビもマンガもないこの暮らしにも大分慣れたし、猫を被っておばさんの料理の手伝いをする様も大分板についてきた。この家の家族はみな暖かく、何のわだかまりも無く佐奈を受け入れてくれたのだ。

問題があるとすれば、髪の毛の根元が黒くなってきてしまったことだろうか。ここには髪を巻くコテもないから、すっかり元のストレートに戻ってしまったている。仕方がないので、おばさんに貰った麻紐で髪を一つに括っているのだ。こんなダサい髪型、前の学校の友達には絶対見せられない。

「ほら、見て。芽が出たんだ」

ホアンの指した先には、土を押し上げて出てきたばかりの植物の芽があった。それがどうしたと言いたいのを堪えて、佐奈は微笑んで問いかける。

「何の芽なの？」

「パノ・チウスという花だよ。昔から伝わる言葉で、『太陽の花』という意味なんだ。大きくて黄色い、まるで、ひまわりのような花が咲く」

そう言うと、ホアンは慌てて口に手を当てた。

「ひまわり？」

それくらいなら、佐奈だって知っている。しかし、この世界にもひまわりがあるのだろうか。

「　　って言うってたんだ。前に異世界から来た人がね」

ホアンはそう付け足した。そして気を取り直すかのように、ポケットから種を出して佐奈に握らせた。

「サナも植えてみなよ。時期的に種まきするにはギリギリの季節だ

けど。花びらは染物に使うし、種は食用にもなる。市場に行けば種で物も交換できるよ」

「へえ……」

佐奈は手の中にある茶色の種を見つめた。この種がお金の代わりにもなるのか。それなら一つ植えれば沢山種が出来る訳だからかなり楽に手に入る。なんて簡単なシテムなのだろう。

佐奈は言われたとおり、種を蒔き、上から土を被せた。ホアンに習ってたつぷりの水をかけると、家の窓からスープのいい匂いが漂ってきた。

「あんた達、朝ごはんだよ」

家の中から、おばさんの明るい声が聞こえた。

実際、この家の人達は少々不安になるくらいお人よしだった。今も、目の前にはにこにこしながらスープを入れるおばさんと相変わらず笑顔以外の表情を知らないのかというホアン、そして朝から畑の収穫作業で疲れているだろうに佐奈にトマトのような赤い実を渡してくれるおじさん。彼らは何も見返りを要求することなく佐奈を気遣ってくれるのだ。

佐奈は軽いため息をついて、赤い実をかじった。口の中に、甘酸っぱい味が広がる。彼らが作る野菜はどれも果物かと思うほど甘かった。本物の野菜はとても甘いと言う父親の言葉が少しだけ分かった気がする。

ふと、部屋が暗くなったのに気付いて佐奈は窓を見つめた。外が暗い。どうやら、雨が降ってきたようだった。

「雨がやまないねえ」

おばさんは、窓の外を見つめて心配そうに言った。

最近、ずっと雨が続いている。今日の空もどんよりと暗く、気温は肌寒い。雨は、どうみてもやみそうに無かった。

「今年はパノ・チウスの出来が悪いかもしれないな」

そう言うのは泥だらけになった体を拭いているおじさんだ。おじさんとホアンはこの雨の中も、作物の根が腐らないように畑の手入れをしてきたのだ。

「その名の通り、太陽の光を浴びないと弱くなってしまいう花だからね」

ホアンが佐奈の方を向いて説明をした。雨の中作業していたからだろう、彼の手は真っ赤になっている。

「……大変なのね」

真っ赤になったホアンの指を見ながら、佐奈は呟いた。このまま作物が育たなかったらどうなるのだろう。今まではニューズで今年は冷夏です、なんて聞いても『ラッキー、今年は涼しいんだ。汗で化粧が落ちなくて済むわ』なんて思っていただけだったのに。佐奈は窓から畑を見つめた。パノ・チウスはどれも成長はしているが、その茎はひよる長く頼りない。まるで日陰で育てたひまわりのようだ。その横で、後から佐奈が植えた種がようやく芽を出していたところだった。

「蓄えておいた種があるから、当分は大丈夫だよ」

おばさんは明るい声で言った。彼女はまるで太陽のようにいつも元気だ。どっしりとした風体でそう言ってくれと少しだけ安心する。けれど佐奈だって分かっていた。みんなが寝静まった後、おじさんとおばさんは毎日どうやってこの不作を乗り越えるかと相談している事を。佐奈さえいなければこの一家の暮らしだってかなり楽になるだろう。

「何で、帰れないのかな……」

ぼつりと佐奈は呟いた。

「帰りたくないからじゃない？」

誰にも聞かれないような声で呟いたはずなのに、ホアンに返事を返されて佐奈は驚いた。

彼は貯めておいたパノ・チウスの種を食用と種まき用に分類しながら

ら淡々と話す。

「サナはここが気に入ったんだよ。それなら僕らは大歓迎だから気にしなくて良いよ」

「なんだか恥ずかしくなつて、サナは小さい声でありがとう、と呟いた。その時、だった。

ガシャン、と音がして家のガラスが割れる音がした。

「化け物が来た所為で雨が止まないんだ！」

まだ幼い、子供の声が続いて聞こえる。

佐奈は立ち上がって窓の方を見た。そこにはまだほんの4、5歳の少年2人が石を家に向かって投げ入れているのが見えた。

「何をしとるか！」

おじさんが玄関から飛び出して少年達に走りよる。彼らは悲鳴をあげて逃げながらも叫び続けた。

「父ちゃんも母ちゃんもみんな言ってる！ この雨は異世界から来た奴の所為だつて！ それを庇うこの家も悪い奴らだ！ お前らの所為で雨が止まないんだ！」

「この餓鬼どもめ！」

おじさんは顔を真っ赤にして子供達を追い払う。佐奈はといえば、ただただ呆然としていた。

化け物？ 異世界から来た化け物？

もちろん、考えるまでもなくそれは佐奈のことだろう。

ホアンはそつと佐奈に近寄り、ぽかんと口を開けたままの佐奈の頭を撫でた。

「……最近、天気が悪いからね。誰かの所為にしたいだけだよ。気にしちや駄目だ」

「雨は……私の所為、なの？」

「そんな訳ない。言っただろう？ この家には過去に何人も異世界からの客人を迎えているんだ。そんな関係性は一切ないよ。たまたま今回は……なんとというか、間が悪かつたんだ」

ホアンは困つたようにため息をついた。そう、と佐奈は俯いた。

「サナ？」

心配そうにホアンが覗きこもつた瞬間、佐奈はがんと机を叩いた。手が痛い。ホアンが目をぱちくりとさせているけど知らない。関係ない。

「　　っざけんじゃないわよ、何勝手に人の所為にしてんのよ！
来たくて来たわけじゃないのに！」

悔しくて涙が溢れる。別にこんな田舎にいたいわけじゃない。いや、どうせ帰っても田舎だけど。佐奈が帰りたいのは一つだけ、可愛いと評判の制服、チェックのスカートを思いっきりミニにしてさっそうと街中を歩くあの風景だ。携帯を片手に友達とファーストフードを食べる、そんな場所だ。それがこんな場所に飛ばされた拳句に化け物呼ばわりなんて。

「……サナは帰りたい場所があるんだね」

少し残念そうに、ホアンが呟く。

「いつかそこに、帰れるといいね」

佐奈は机の上で拳を握り締めた。

そんな日なんて、来ない。女子高校生の内にあの街に帰れるなんて可能性は皆無だ。

雨が止んだのは、それからさらに日がたつてからだつた。

晴れ渡つた空に久しぶりに輝く大きな太陽。外に出た佐奈は眩しくて思わず手を翳した。

久しぶりの天気ということ、周りの家もみな今日は忙しそうだ。楽しげに畑を駆け回っているいつぞやの少年2人をみかけて、佐奈は石を投げつけてやるうかと思つたがなんとか堪えた。

忙しいのはこの家だって例外ではない。おばさんは朝から洗濯で走り回っているし、おじさんとホアンは畑にたまつた水を必死にかき出している。佐奈はおばさんが洗つた洗濯物を外に干すのを手伝

っていた。

「サナがいて助かるねえ」

おばさんはここにこ笑いながらエプロンをヒモで吊るした。佐奈は少し照れながら大量のタオルを干していく。そう言われるのは正直嬉しい。自分に出来る仕事があれば、『ここにいれる』と認められている気がするのだ。

しかし、喜んではばかりはいらなかった。

パノ・チウスはこの家ばかりではなく、近隣一帯で大打撃を受けたのである。ちょうど花を咲かそうとしていた時に降った豪雨で、重みに耐えかねた茎が折れた事が原因だった。

「今年は酷い年になったな……」

流石のおじさんも、弱音を口にした。流石のおばさんですら、「なにを辛気臭い顔してんだい」と笑った顔が、苦しそうだ。

そんな空気を壊したのは、ホアンだった。かれは興奮した面持ちで飛び込むように彼らの中に入って来たのだ。

「蕾が！ 蕾がついてるよ！ パノ・チウスに！！」

「何を言って あれは、すでに折れたはずだろう」

「サナのだよ！ サナが植えたのは遅かったから、ずっと成長が遅れてたんだ。それが今日、やっと蕾をつけたんだよ！」

佐奈は目を見開いた。

おじさんもおばさんも、同じように驚いていた。確かに、豪雨でほとんどの蕾は折れてしまった。その間、まだ完全に成長していなかった佐奈のパノ・チウスがじつと雨を耐えていたというのか。

「とりあえず見てみてよ！ ほら」

ホアンに引つ張られるようにして植えた場所に赴いた佐奈は、頼りなく、それでも確かに蕾をつけている花を目にした。よく見るとあと2、3本蕾になりかけの花もある。

「こんな小さい種が、花をつけるんだよ。凄いよね、サナ」

ホアンはまだ興奮が冷めないといったように顔を赤らめながら、佐奈の手にパノ・チウスの種を置いて笑いかけた。

「凄いわ。サナのお陰ね」

おばさんが両手を合わせて喜んでいた。

「ああ、そうだ。折れた蕾も、水に浸しておけば花が咲くかもしれないねえ。売り物にはならないだろうけど、家で使う分には使えるんじゃないのかね」

「なるほど、それはいいな」

おばさんの提案に、おじさんも頷く。そんな彼らを見て、佐奈は自然と笑みがこぼれた。

そっと、蕾に手を伸ばす。一体、どんな花が咲くのだろう。見てみたいと、思った。出来る事なら、佐奈の父親や母親も、一緒に。

「あんた、こんな所で何寝転がってるの」

母親の言葉で、佐奈は気がついた。階段下の廊下で、佐奈は仰向けに転がっていたのだ。視線の先には母親の姿。大きな帽子と、日焼け対策にタオルで顔を覆っている所為で表情は読み取れないが、恐らく呆れた顔をしているのだろう。

「帰って、来た……？」

佐奈がいるのは、確かに自分の家だった。もちろん田舎の家、ではあるが。のろのろと上半身だけ起き上がった佐奈は階段を見上げる。

「そついえばさつき凄い音がしたけど。まさか階段から落ちたの？ ドジねえ」

そつ言いながらも、母親は「頭打ってないの？」と聞いてくれる。佐奈は無言で頷いた。

どうやら、階段から落ちたのはついさっきの事らしい。それならば、あの村での出来事はほんの一瞬の事だったのだろうか。

立ち上がった佐奈の足元に、一粒の種が落ちていた。それに気付

いて、その種をそつと手にとってみる。

「あら、ひまわりの種？」

母親の問いに、佐奈は首を横に振って答えた。

「植えるなら庭の空いてる所好きに使っていいわよ。でも、一旦植えたからには最後まで面倒みなさいよ。植物を育てるのは簡単じゃないんだから」

「大丈夫、知ってる」

佐奈はそういうと、種を握り閉めて玄関へと向かった。階段から落ちた所為で、髪がぐちゃぐちゃになっている事にも気づかなかつた。この花は絶対咲かせてみせる。そして、出来た種を、また来年植えるのだ。

きつと綺麗な、花が咲く。

「行っちゃったねえ……」

普段からは想像もつかない寂しそうな声で、丸い顔を曇らせたおばさんはそう言った。

「ホアン、あんたもさ、いつでも元の世界に帰っていいんだよ」

そう言っつて人の良いおばさんはホアンの方を向く。その言葉に、机の上で乾燥木の実を潰していた少年は穏やかに笑った。

「僕はここが好きですよ、母さん。アスファルトに囲まれた町より、ここの方がずっと僕に合っています」

「そう……」

小さな声で呟いて、おばさんは裁縫道具を取り出した。冬に向けて、暖かい上着を縫おうとしているのだ。

「でもね、ホアン。もし、もしもあんたが元の世界に帰る事があつたら、」

椅子に腰掛け、針に糸を通しながらおばさんは続ける。

「その時はサナに、よろしくね？」

その言葉に、ホアンは一旦手を止めた。窓から外を眺めれば、気持ちのいい青空が見える。彼女のいる世界も今日は晴れだろうかと、ぼんやり考えてみる。

「はい」

ホアンは笑顔でそう返事をする。再び木の実を潰し始めた。

一生懸命腕を動かす彼の横で、棚の上に置かれた木彫りのカップに折れた花が生けられていた。そこには、大きな黄色い花が鮮やかに咲き誇っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2466ba/>

太陽の花が咲くとき

2012年1月6日09時45分発行